

「知識は人を高ぶらせ」

コリント人への手紙第一 8 : 1 - 13

January.1.2022

コリント人への手紙第一 8 : 1 - 13 (パウロ)

Preface

昨日の元旦礼拝に続き、今年の主題聖句について、一緒に考えていきたいと思っています。

もし、昨日の元旦礼拝にご出席できなかった方がおられましたら、教会のホームページに入ればメッセージが聞けますので、ご利用いただければと思います。

また、必要な方には CD や説教原稿もお送り出来ますので、もし必要な方が周りにおられましたらお知らせくださいますと感謝です。

では、昨日も読みましたが、もう一度、壁に掛けられている主題聖句を皆で声に出して読んでみましょう。

(オンラインの方々は、画面に出る御言葉を読んでみてください。)

**「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。愛は多くの罪を覆います。
だから何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。」(パウロ)
(第一コリント 8 : 1 - 3, 第一ペテロ 4 : 8)**

私が 25 年前に初めて出会ったイエス様は、知識を振りかざす方ではありませんでした。

知識ではなく、ジワーッと心いっぱい広がる愛を感じさせてくださる方でした。

また、私にイエス様の十字架の愛を伝え教えてくださった方々も、知識を振りかざす方々ではなく、自らイエス様の温かい愛を体験し、「愚直にその愛を伝えたい」という温かさに溢れているように感じました。

それまでの私は、少し大げさに言いますと、「人は、知ることによって強くなり、武装し、バージョンアップし、他者の攻撃から自分を守ることにも出来、または攻撃する場面になれば効率よく攻撃でき、それが私に勝利をもたらしてくれるけれども、全くもって知識が足りない阿呆だから色んな知識を蓄えなくちゃ」と思っていたようなところがあったと思います。

イエス様を信じる恵みに与った大学生の頃、当時住んでいたつくばという町は、その名もずばり「研究学園都市」で、筑波山の上から石を投げれば、その石が博士号を持っている人にあたるという冗談なのか、本気なのか定かではない話が、本当のように聞こえる日本有数の「知」を誇る町でした。

現在は、昔以上にそういう町になっているかもしれません。

もちろん、つくばという町は、神様の一般恩恵として素晴らしい「知」が繰り広げられており、たくさんの人々がその「知」の恩恵に与っているという事実を作り出しているすごい町であるということも、事実だと思います。

でも変な話、学生時代の私は、そういう町に住んでいるというだけで、なんかちょっと自分が知的な人になったかのような高ぶりと言いましょか、横柄、自慢たらしい思がありました。

今でも、つくばで買い物をしていますと、「僕はここで、昔、学生生活を送ったんだ」みたいな、ちりにもゴミにもならないような、下らないなんていう言葉さえも勿体ないぐらいの変な高慢ちきな気持ちが出てきたりもします。

子供の頃から、誰もがムッとするようなイラッとするような言葉がありますが、それは、「ええ、そんなことも知らないの〜？」という言葉です。

または、言葉は発せずとも、「ええ、そんなことも知らないの〜？」という表情です。

友達に言われても、兄弟に言われても、また言葉にしなくても、そんな表情をされた時には当然のように腹が立ちますし、年上や目上の方に言われると、「何だよ、自慢気に！」という思いと共に、知らないということに恥ずかしいだけでなく、羞恥心さえ覚えてしまいます。

なので、知ったかぶりをする事数知れず、知ってないけれども知ったふりをしてでも、見下げられたくないという思いが先行し、知った時には、なんかちょっと心が高慢ちきになります。

人間誰しもが、知識がないことに引け目を感じ、知識があることに高ぶりを覚えます。

遡りますと、昨日も少しお話ししましたが、最初の人アダムとエバが誘惑され、欺かれた言葉も、「知る者になれるぞ！ 知者になれるぞ！ 神をも凌駕する知識を得られるようになるぞ！」という言葉でした。

それほどに人は、知識に対する劣等感と、劣等感ゆえの優越感に浸りやすい罪人です。

でも、イエス様は、「知らない」ということを一度もたしなめたり、小馬鹿にしたことはありませんでした。

その代わりに、愛してくださいました。

配慮してくださいました。

覆ってくださいました。

愛をもって育ててくださいます。

Part One

誰の目から見ても明らかに恥ずかしいことをした姦淫を犯した女性に対して、その場に居合わせた皆が皆、「この女は、人として間違った破廉恥なことをしている」という“知識”をもって責め立て、見下げ、裁き、殺意まで抱くような中でも、イエス様お一人だけは、正しい知識を振りかざすようなことはなく、その罪を覆ってあげ、慰めてあげ、力づけてあげ、自分で自分を傷つける自らの奴隷状態から解放し、赦しと自由をその女性に与えてくださいました。

イエス様は、「間違っていることをしている」という知識をもって、この女性を責め立てるのではなく、間違っていることを間違っていると確かに指摘はしつつも、その痛みに関心し、愛してくださいました。

私たちも実際のところ、この女性と何ら変わるところなく、ただただこの女性と同じようにイエス様が出会って下さり、赦してください、覆ってください、励ましてください、立たせてください、痛みに関心し愛してください、今、こうして私たちは主イエス様を礼拝する場にいることが出来ています。

つまり、知識が私たちを救ったのではなく、イエス様の愛が私たちを救ってくださいました。

でも、この愛を知識に変えて、「その知識をもって相手よりも優位に立ちたい」という罪なる欲求が私たちの内から湧き上がってきます。

ただただ、恵みのうちに愛を受けたのに、その愛でさえも、「私という人を誇る知識に変えたい」という欲求に飲まれ、愛を知識にして、イエス様が命を懸けて守ってくださった人をも責め、見下ろしてしまいます。

取税人や遊女等の罪人たちと食事をしておられるイエス様を責め立てた、神を信じ神の言葉について精通していたはずのパリサイ人や律法学者のような思いが、私たちの内にもあります。

私たち自身には、自分には愛を適用させ、他者には知識を適用させるような思いが、私たちの内にも確かにあります。

今、使徒パウロの書いたコリント人への手紙の受け取り手であるコリント教会でも、正に、このような問題が起こっていました。

受けた愛を知識に変え、イエス様が命を懸けて愛してくださった神の家族、兄弟姉妹を差別する自体が起こっていました。

Part Two

イエス様は、その心が愛で満ちたお方です。

この点に関して意義のある方はおられないでしょう。

それならば、イエス様を、いのちだと、救い主だと、王だと受け入れ、神の霊が住んでくださる神の宮として仕えている人々は（私たちは）、イエス様と同じようにその心に愛が溢れているはずです。

また、神の愛ゆえに集められたキリストのからだである教会は、神の愛という最も大事なことにおいて、一つであって然るべきでしょう。

でも、実際はそうでもないのが地上の教会であり、キリスト者一人一人であり、謙遜にならなければならない理由でもあります。

だからこそ、神様からすれば愛し甲斐のある存在であり、群れであることは間違いありません。

新約聖書におけるコリント教会も、まさしく、代表的な愛し甲斐のある教会でした。

キリストの名において集まったはものの、争い、躓き、破れ、互いに壊し合ってしまうようなところが多々ありました。

でも、神妙なことにと言いましょか、見事なことに、パウロはそんなコリント教会のことを「神の教会」、「キリスト・イエスにあって聖なる者」、「キリスト・イエスにあって、あなたがたのことをいつも神に感謝しています」と、第一コリントの冒頭部分を見ますと言っています。

これは、パウロのおべっかやゴマすり、お世辞ではなく、本心です。

なぜならば、パウロは、神の愛とは、私たち人間側の行いに左右されるものでは全くなく、神様が「そうだと仰るならば、そうだ」という全的に・全面的に神様の意思、恵みだということをよく分かっていました。

人間の目から見て、どんなに足りなく見えても、どんなにあり得ないと思えても、神様が「そうだ」と、「いいんだ」と仰り、愛を施したならば、「いいんだ」と「良し」なんだと、人間がその評価をひっくり返すことなんか出来ないという神の主権的恵みをよく分かっていました。

パウロは実際に、その恵みを体験した者として、神の愛を人の知識に挿げ替えて、コリント教会を見下ろし、裁き、こき下ろすなんてことは大それて出来ませんでした。

パウロは、神の愛を知識に挿げ替えた時の無慈悲さ、悲惨さ、残忍さ、無毛な熱心さ、人を深く傷つけて終わるということを心底経験した人でもありました。

パウロが、サウロと名乗っていた律法学者、熱心なパリサイ人、エリート階級、

出世街道まっしぐら、知識人、知性も名声もあり、誰よりも神を信じることに熱心であり、聖書の言葉をよく研究し、蓄えた知識において右に出る者はいない程の人だった時、彼は、自分の知識を振りかざし、たくさんのキリスト者たちを血祭りに上げていました。

そんな彼が、真にキリスト・イエスに出会い、神の愛を知り、神の愛に赦され、神の愛に覆われ、神の愛に降参をしたその時から、知識をもって高ぶり、知識をもって人を否定し、傷つけ、死なせることから足を洗いました。

神の愛は知識ではなく、昨日のメッセージでも話しましたように、「私が死に、キリストが私のうちに生きておられる」という愛でしかないということを、五臓六腑に染み渡るほどに強く実感しました。

「キリストゆえに私が死ぬ。私は死に、キリストが私のうちに生きておられる」という愛に生きざるを得ない程に、そこにある喜び、自由、解放、救い、真理、キリストとの一体を実に経験し、分かっていました。

だから一見しますと、あんぽんたんに思えるコリント教会のことを、コリント教会の信徒たちを見下げるようなことは一切せず、そこに神の愛を見、神の愛によって接し、神の愛によって感謝を覚えました。

もちろん、しっかりと言うべきことは言い、間違ったことは間違っていると指摘しながら、神の愛を取り違えてしまっていることを、厳しく追及し、叱責します。愛をもって。

特に、この第一コリント8章では、高々食べ物の中で、人を見下し、劣等感を煽り、優越感に浸りながら、「信仰者として正しいことをしている！ 私はあの人よりも強い信仰を持っているし、信心深いんだ！」と勘違いしている人たちの間違った熱心な信仰姿勢を叱責しながらも、愛を説きます。

説くだけでなく、「神の家族を愛するために、神にある兄弟姉妹を躓かせないためならば、金輪際、躓きの原因となっている肉を私は食べない」とまで宣言してしまいます。

Part Three

コリント教会の教会員同士が争うほどの問題になっていることのうちの一つが、偶像に献げた肉を食べるのか食べないのかという問題でした。

古代コリントでは肉を市場で買っていましたが、その売っている肉の大部分は、異邦の神々が祀られている神殿に一度奉納された後、売られている物でした。

そのためか、クリスチャンたちが肉を食べるとなると、どうしても後ろめたいような、なんとなく気が重いような、気が乗らない気が進まないような気がして、

そんな思いをしてまで肉を食べるならば、「食べない方がいい」と思った偶像の神々の効力を拭い切れないクリスチャンたちがいた一方で、「何馬鹿なことを言っているんだ！ 偶像の効力なんか無いんだから、そんな信仰の弱いことを言っちゃだめだよ！」と、これ見よがしに、自慢げに、誇らしげに、ひけらかすように、肉を食べないクリスチャンたちを見下すかのようにあえて彼らの前で、偶像に献げられた肉を食べていたクリスチャンたちがいました。

この問題について、パウロは、「神は唯一で、神々なんていうものは存在せず、天地万物をお造りになった唯一の神様がお造りになったものを感謝して食すことは、全くもって問題ない」と言います。

でも、その正しい知識を、それまでの習慣ゆえにすんなりと受け入れることの出来ない信仰的良心に咎めを覚えてしまう人たちを、正しい知識を振りかざしながら、彼らを裁いたり、「信仰的に劣る人たちだ」と批判することは決してあってはならないことだと言います。

「その批判に愛はあるんかい？」と問うたら、愛はありませんでした。

だから、この愛のない知識のひけらかしを、パウロは「それは違う！」とはっきりと注意します。

高々、食べ物することで優劣をつけるなんてことは、神の愛に反するというわけです。

コリント人への手紙第一 8 : 8 - 9 (パウロ)

使徒パウロは、高々、食に関する知識や食する食べ物で、人の優劣を付けようとする根深い劣等感と優越感をここであぶり出します。

確かにイエス様も、食べ物や食べ物の食べ方で人を判断し、その人の育ちや背景を批判しようとしたパリサイ人や律法学者たちを、「口に入る物がその人を汚したり、その人の価値を決めるのではなく、口から出る言葉が人を傷つけ、またその人の品性や人となりを表すのです」と一喝し、一蹴されたことがありました。

復活され、弟子たちにそのお姿をあらわされた時には、「まことに神を信じ、まことに神と共に生き、またまことに神の御旨ならば、毒を飲んでも決して害を受けることはない」と、「食べ物はその人の人生を左右するのではなく、神と共に生きているのかどうか、その人の人生を左右する」と、はっきりと仰いました。

これは、至って聖書的な正しい知識です。

パウロも当然ながら、このことを知っていました。

だからと言って、この知識を振りかざして、「信仰の弱い人たちを批判している」なんてことは、決して言いませんでした。

むしろ、彼らのために、こんなふうに言います。

コリント人への手紙第一 8 : 11 - 13 (パウロ)

パウロにとって大事なことは、「そこに愛があるのか？ あなたが神から受けた愛の体現があるのか？」ということでした。

「大人になったらいずれ分かるだろうことを、必要以上に責めて、非難して、咎めて、叱って、子供を劣等意識に陥らせないために、節度をもって見守ってあげる親心のような愛が、そこにありますか？」と問うわけです。

Part Four

パウロにとって大事なものは、正しい知識を正しく説くことではなく、その知識を適用する際、そこに愛の配慮があるのか？ そこに愛の赦しがあるのか？ そこに愛の受容があるのか？ 「そこに愛はあるんかい？」ということでした。

先程も話しましたが、サウロと名乗っていた時の昔のパウロは違いました。

何よりも自分の考える正しさが第一で、その正しさに立脚した熱心さが正義で、その正義をもって人に相対した時、どんなに相手が傷ついたとしても、それは正しい行いであって、人を傷つけることは正しいことを貫く時に必ずや付いて回る副産物であって、致し方ないことだという確固たる知識のもと生きていました。

でもイエス様に出会ってみたら、知識ではなく、愛でした。

完全に、人生の価値観がひっくり返りました。

どんなに知識に長けていても、そこに愛がないならば、無用の長物だということをキリストの愛によって悟らされてしまいました。

そんな愛を知ったからには、その愛を無視して生きることは、神を否定するばかりか、自分という存在を否定することにもなります。

だからパウロは、「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます」と言わずにはおられず、愛をもって教えてくれたわけです。

私たちの生きているこの世界、もしかしたら、知識専攻の無用の長物で、ここまで世の中回してきた結果、みんな悩んでいるのかもしれない。

いや、そういっても過言ではないでしょう。

だからイエス様は、知識が支配する世の中に、ご自分の身を献げながら、愛を示し教えてくださいました。

もちろん、知ることを、知識を、聖書が、パウロが、神様が、全面的に否定しているわけではありません。知ることは大切なことです。

しかし、私たち皆が良く知っている箴言の言葉、

「主を恐れることは知識の初め、聖なる方を知ることは悟ることである」という言葉に立脚しない知識は、結局のところ、無用の長物へと至ってしまいます。

なぜなら、そこには、愛の入る余地が無いからです。

このことをパウロは、8：2でこう言います。

コリント人への手紙第一 8：2（パウロ）

ここで「知るべきほどのこと」とは、愛です。

神は愛なりということゆえの他者に対する愛ある配慮、愛ある赦し、愛ある受容です。

今の世の中ほど、知識に満ちた世界は未だかつてありませんでした。

知識に満ちているばかりか、スマートフォンに掛かる親指一本で、ありとあらゆる知識を検索し、見て、知ることが出来ます。

下手すると、専門家よりも専門的な知識を得ることが出来るのが、今の世界です。

また、「自分は何かを知っていると思う人」で満ちているのも、今の世界です。

知らないことに不安を覚えてきた人類は、知ることに全精力を費やしてきました。

そしてついに、「自分は何かを知っていると思う人」だらけの世界になりました。

でもそこには、知るべきことを知らないという事実が蔓延っています。

では、知るべきこととは何なのか？

「知識が人を育てるのではなく、愛が人を育てる」ということです。

愛すること、配慮すること、自分に死ぬこと・折れること、赦すこと、愚かになることです。

「私は死に、キリストが私のうちに生きておられる」という愛です。

天地万物をお造りになった唯一の神様が命を捨てるほどに、私たち人類に親心で接してくださっている愛を知らず、その親心の愛で他者を愛することの重要性を知らないというのが、私たち、私たちの世界です。

知識よりも、愛することの方が大事だということを知らない世界です。

さらにパウロは、3節でこう言います。

コリント人への手紙第一 8：3（パウロ）

人間には、知ることよりも大切なことがあります。
それは、「知られている」ということです。
誰に？ 神にです。

「神に知られている」ということのみが、知らなければならないという不安、
知りたいという劣等感、知ることによる優越感、知り続けなければならないとい
うアリ地獄のような束縛から解放し、救い、自由にし、安心を得、平安が与えら
れるばかりか、平安のうちに物事を知ることが出来るようになります。

私たちの不安の根本は、知らないことによるものではなく、神に知られている
という実感がないことによるものです。

「神を知ることが知識の初め」という言葉を言い換えますと、「神に知られて
いることを知ることが、知識の初め」ということです。

主イエス・キリストは、「あなたのことを何から何まで、愛の内に知っていま
すよ」という神様からの愛のメッセージのあらわれでもあります。

Conclusion

私たち人は、人に知られたいという欲求がありますが、人にとって大事なこと
は、神に知られていることを知ることです。

そして、知ったならば、なおさら神を愛することです。

そして、神を愛したならば、愛に生きることです。

愛に生きるとは、「私は死に、キリストが私のうちに生きておられる」ことを
覚えることです。

「私は死に、キリストが私のうちに生きておられる」ことを覚えることとは、
イエス・キリストから目を離さないことであり、隣人を自分のように愛すること
です。

隣人を自分のように愛すとは、神を、主イエス様を知っていくことを最も大切
にすることです。

神との関係の深まりが、愛に生きることとなります。

つまり、神との関係は、人との関係にあらわれます。

最後に、神の言葉にある愛の真意を宣べ伝えれば宣べ伝えるほどに、人々から
認められず、邪魔者扱いされた預言者エレミヤに語り掛けてくださった主の言
葉と、その言葉に応答したエレミヤの信仰の告白を見て終わりたいと思います。

エレミヤ書 9：23－24（パワポ）

エレミヤ書 18：23（パワポ）

主よ、あなたはみなご存知です。

主を知ることを誇り、主に知られていることを喜びましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エレミヤ書 9：24 a